生活時間のタイプ別事例分析

生活時間に基づく住居内の行動と空間の対応関係に関する研究 その3

A QUALITATIVE EXAMINATION OF RESIDENTS' VIEWS ON THEIR ACTUAL
DWELLINGS BASED ON A CLASSIFICATION OBTAINED THROUGH
A TIME ALLOCATION ANALYSISA study on the correspondences between behaviors and spaces in dwellings,
based on time allocation analysis Part 3

山崎 さゆり*

Sayuri YAMAZAKI

The first two parts of this study examined quantitatively the correspondences between people's behavior and their use of dwelling space, using a time allocation analysis. A classification of behavioral types was then developed. Based on this classification, as presented here, the third part looked in detail at how residents view their actual dwellings.

The results suggest that designers should reconsider their standard "white-collar worker family" model and offer alternative designs that allocate appropriate spaces for the elderly, for "double-income with kids" families, and for hobby or in-house working requirements. The significance of balconies and gardens should also be considered in design processes.

Keywords : time allocation, lifestyle, dwelling, behavior, spending hours in the place, correspondence analysis

生活時間、生活様式、住居、行動、滞留空間、対応分析法

1. はじめに

本研究は、成人男女の1日の生活時間の配分の仕方に基づき、住居内における人の行動と空間（場所や部屋）がどのように対応しているのかを明らかにする中から、今後の住居が持つべき条件、計画上の留意点や課題を見い出そうとするものである。

本研究における分析（表1）は、定量的分析（①～③）と定性的分析（④）との二段階から成る。前者の定量的分析では、生活時間調査データを用いた統計的データ解析を行い、人々の生活時間配分の特徴を把握しつつ、行動と空間の対応において大多数が従う一般例（標準集団）を押さえた上で、少数の特殊例（特異な類型）をその対応の仕方（タイプ）別に抽出していく。一方、後者の定性的

分析では、得られた各タイプ毎に住居平面や住まい方を含めた個別的・多面的な事例分析を行うことにより、具体的な生活実態を明らかにし、併せて今後の住居計画における方向性を見つけ出していく。

いわゆる「住まい方研究」においても、大多数の一般的な住まい方・住要求を押さえた上で、少数の特殊例に着目する中から住生活の方向性の萌芽を見い出して行く。そしてそこでの一般と特殊との区分は、詳細な事例分析の過程から導き出される。

これに対し本研究では、生活時間調査データを用いた統計的データ解析によって、一般と特殊とを区分しつつ類型化を行う。つまり、事例分析に先立ち、生活時間の配分の仕方にみられる傾向・特徴からあらかじめ類型化・タイプ分類を行っておくことで、実態把握のプロセスの一部を可能な限り客観化しようとしたわけである。

第1報³⁾では、生活時間配分に基づく類型化の前段階として、生活時間調査データの特徴を基本統計量等から把握（表1・①）した後に、平日の行動時間（表2の12変数）を対象とした類型化を行い、得られた各類型と基本属性との関係について分析考察した（表1・②の一部）。その結果、1) 本研究における類型化には、対応分析法とクラスター化法の採用が有効であり、2) 男性平日において、何らかの行動時間に重点を置く特異な時間配分の類型（特異な類型）の種別には、年齢と勤務形態⁴⁾が関わる。3) 単独で行う家事（house1）

表1. 研究全体の分析の流れ

①	生活時間調査データの基本統計量を基に分析を行い、多変量解析に先立って前提条件となるデータの特徴を明らかにする。
②	行動時間・滞留空間の各々について、各人の費やした時間配分の比率パターンを基に類型化を行う。得られた各行動類型・空間類型について、基本属性との関係を考察検討する。
③	行動類型と空間タイプの対応関係に注目し、②で明らかになった、これらに密接な関係をもつ基本属性との関係を含めて分析する。
④	③で判明した行動類型と空間タイプの対応の仕方（タイプ）別に事例分析を行い、具体的な行動と空間の対応関係を明らかにしつつ、今後の住居の持つべき要件を見い出す。

* 調布学園短期大学人間福祉学科 講師・博士(学術)

Assistant-Prof., Dept. of Human Welfare, Chofu Gakuen Junior College, Ph. D.

表 2.行動時間変数

変数名	行動時間内容・行動例
out	外出（住居外で過ごす時間）
physic	食事 排泄 薬を飲む
groom	入浴 化粧 整髪 洗面 歯磨き 着替え 外出準備
relax	ぼんやり うたた寝 おやつ 考え事 お茶を飲む
house1	（単独で行う）衣食住の家事 介護 夫の世話
house2	（複数で行う）同上
child	子どもの世話 勉強をみる 中学生以下の子と話
conver	（大人同士）会話 団らん 見送り
society	手紙を書く 電話 接客 アンケート記入
pastime	テレビ 新聞 音楽 読書 ゲーム
hobby	楽器演奏 生け花 編物 学習・研究 絵画
work	仕事 収入を伴う活動（準備・片付け含む）

表 3.滞留空間変数

滞留空間名称	変数名	室空間例
住居外空間	sp-out	外出（out と同）
非限定共有空間	同室者有	Fp リビングルーム
	同室者無	Fs ダイニング
限定共有空間	同室者有	Cp 夫婦寝室 母子寝室
	同室者無	Cs 夫婦書斎
専有空間	P	（本人の）専有空間
他者専有空間	R	子ども室 客間
家事空間	K	台所 家事室
生理的空間	W	浴室 洗面所 便所
室外空間	B	バルコニー 庭
その他	X	納戸 廊下 玄関

表 4.家族型

（18 歳以下の子あり）
末子 3 歳未満
末子就学前
末子小学校低学年
末子小学校高学年
末子中学生以上
（18 歳以下の子なし）
若年子どもなし
中年子どもなし
高年子どもなし

表 5.行動類型と空間タイプの対応関係

(N = 件数)

男 性 N=231						女 性 N=262									
平 日			休 日			平 日			休 日						
行動類型	空間類型	N	属性の傾向	行動類型	空間類型	N	属性の傾向	行動類型	空間類型	N	属性の傾向	行動類型	空間類型	N	属性の傾向
normal	sp-normal	210		normal	sp-normal	186		normal	sp-normal	220	子どもあり 無職orパート	normal	sp-normal	231	
relax	Cp			house2	Cp			house1	Cp			relax	Cs-Cp		
society				society	R			house2	R			house1	R		
hobby				pastime	X			child	X			house2	K		
house1	B	1	60歳以上・無職	relax	Fs	1	高年子なし	conver		2		conver			
hou2-chi	R	2		house1	R	2	高年子なし	relax	Fs	2		conver			
	K	2			W	1		society	P	4	高年子なし	society			
conver	Fp	4			B	3		Fs	2	2	中高年子なし	pastime	Cs	1	中年子なし
pastime	Cs	4	60歳以上	child	K	2	末子3歳未満	pastime	Cs	1	中年子なし	pastime	Fs	3	高年子なし
work	P	5	在宅勤務or個人自由業	conver	Fp	2		hobby	P	5	高年子なし	hobby	P	6	高年子なし
	Fs	3		hobby	P	5	中高年	work	P	8	高年子なし・在宅勤務	work	Cs	1	(中年以上)
				Cs	2			Fp	3	中年以下・在宅勤務	work	P	2		
				work	P	6	中高年	out	sp-out	13	若年子なし・常勤	out	sp-out	6	若年層
				Cs	4			—	B	4	高年子なし	groom	—	2	高年子なし
				out	sp-out	15	若年子なし					—	Cp	3	末子小学生以下
												—	B	7	中高年子なし

は、女性にのみ一般的な行動時間であり、また、男性平日に比べ特異な類型に属する者が多いが、その行動類型の種別は、勤務形態と家族型（表 4）の違いに大きく依る等が判明した。

また第 2 報⁵では、男女別の行動時間、平日・休日の各滞留空間（表 3 の 11 変数）を対象とした類型化の結果を示した上で、それらの各類型と基本属性との関係、及び男女、平日・休日別の行動類型と空間タイプの対応関係についての解析プロセスとその結果（タイプと属性の傾向）を報告した。表 5 はこの解析結果をまとめたものである。

本報では、以上の定量的分析から導き出された各タイプ毎に行った事例分析による結果を報告する。これは、本研究における最終段階（表 1・④）、かつ、最も中心となる分析として位置付けられる。

2. 生活時間に基づくタイプ別事例分析

本章では、表 5 における行動と空間の各タイプの組み合わせ（タイプ）毎に行った事例分析の要点と結果を報告する。

2-1. 標準型の行動と空間

標準型⁶とは平日・休日共に行動類型が「normal」かつ空間類型が「sp-normal」のサンプルであり、男性 60・女性 68 が該当する。

標準型の基本属性は、家族規模がやや大きい、年齢及び末子年齢がやや若い、住宅規模はやや小さめ等の傾向が見られた。また、男性・夫の職業は、いわゆるホワイトカラーのサラリーマン（会社役員・管理職・専門技術職）、女性・妻の勤務形態では「無職」と「パート」の割合が全体より増加し、各々合わせて約 8 割を占めていた。

標準型については、平日・休日各々の行動類型と空間タイプの確定プロセスで算出された対応分析第 2 回目のサンプルスコア⁷を用い

て典型例（男性 5・女性 3）を取り出す⁸ことにより、その特徴を確認することとした。その結果、全ての典型例において、前報の定量的分析の結果を裏付ける生活時間配分⁹を示しており、また夫婦寝室はほぼ就寝空間としてのみ機能し、他の個室は子ども室として確立していた（図 1・2 は、最も典型例とされた¹⁰男女サンプルの住居平面）。つまり、各室空間の規模・形やつながり方、バランスにおいて、各種住宅事情や設計の不適等の問題はあっても、標準型の時間配分で生活する限りにおいては、nLDK 型の計画理念で設定¹¹された諸行動と各空間用途とは大きく矛盾していないと言える。

2-2. 生理的生活時間に重点を置く「relax」の場合

「relax」は、男性休日と女性平日の「Fs」と対応関係が認められた。この 3 例（A、B、C さん）のプロフィール等を以下に示す。

<A さん（女性）>

個人属性：72 歳 無職 家族属性：単身（本人が 24 歳の時に夫戦死）
住宅属性：集合住宅 2 階 持ち家 住戸面積 52.00 m²
ヒアリング時の特徴的な言葉：
「結婚し独立した息子とは、年 1、2 回しか会わない。電話もほとんどない。息子夫婦の所へは遠慮があって行けない。」
「近所付き合いはない。煩わしい。」
「趣味は書道。でもそれほど好きじゃない。」
「書道を通しての友人とは、用事があれば電話で済みます。」

<B さん（男性）>

個人属性：71 歳 常勤 事務職（60 歳で定年退職後に再就職）
家族属性：単身（妻 3 年前より入院中）
住宅属性：一戸建 持ち家 住戸面積 85.98 m²
ヒアリング時の特徴的な言葉：
「結婚し独立した息子 3 人は、嫁の実家とのつきあいの方が多い。」
「息子たち家族に遊びに来て欲しい。若い人から隔離されると滅入る。」
「趣味の基は基会場です。そこでのつきあいはその場限り。」
「家に居るときはほとんど食堂で過ごす。」

<C さん（女性）>

個人属性：74 歳 無職
（付租癩症。1 年前から帯状疱疹で健康状態さらに悪化）

図1. 男性標準型の住宅平面図

図2. 女性標準型の住宅平面図

図3. Dさん(「house1」・「R」)の住宅平面図

図4. Eさん(「house1」・「W」)の住宅平面図

図5. Fさん(「child」・「K」)の住宅平面図

図6. Gさん(「hobby」・「P」男性)の住宅平面図

図7. Hさん(「society」・「P」)の住宅平面図

図8. Iさん(「hobby」・「P」女性)の住宅平面図

図9. Jさん(「work」・「P」)の住宅平面図
(図中、□で囲んだ室名は、居住者による日常呼称である)

家族属性：夫（66歳・無職）、長女家族（長女の夫と子ども2人）
 住宅属性：一戸建て（二世帯住宅）持ち家 住戸面積 123.19 m²
 ヒアリング時の特徴的な言葉：
 「体の具合が悪いので、とにかくゆっくりして過ごす。」
 「庭を眺めたり、通信販売のカatalogをゆっくりみている。」

いずれも70歳代でありFs以外の“余室”をもつ。また、ヒアリング時の言葉から類推すると、*relax・Fs*の割合が高いのは、自らの選択の結果とは言い難い。Cさんの生活は思わしくない体調に規制されており、他2例についても自発的に趣味や他者との接触等を求める気力は感じられない。しかし、人と接触せず孤独でいたい訳ではなく、これはヒアリング調査がどのサンプルもかなりの長時間に及んだことにも端的に現われている。対人関係における能動的な要求は弱くとも、自分を理解して優しい言葉をかけて欲しい、といったいわば受動的な要求を強く持っていると考えられる。

このような人々の住居は、訪問者の気軽な受け入れを促しつつ、居住者側がコントロール可能な空間構成を持つことが必要と考える。具体的には、住居内外の接点（玄関、縁側等）が閉鎖的でないことに加えて、そこから住居内の私的な空間に至るまでが、親しさの度合いや種類によって場の設定を選択出来るような空間構成である。

2-3. 家事的な生活時間に重点を置く男性の場合

2-3-1) 「house1」・「R」

「house1」・「R」とは、“寝たきり”の高齢者の居室での休日の介護等であった。2例共に60歳代前半であるが、その住生活には、要介護者と同居家族の異質な生活による歪みが生じていた。内1例では、住宅の広さや間取り、介護者の都合等の種々の事情から、2つの住宅で週の半分ずつ暮らすといった変則的な生活を強いられていた。またDさん（図3）の「15畳位の洋室が別にプラスして欲しい」という強い希望は、以下の状況から来たものである。

- 1 「祖母のへや」を室内環境条件が良い東南の奥の部屋としている。
- 2 「祖母のへや」の隣室の「ざしき」を、夫妻と長女の就寝室とする。（他室が物で埋まっていること、及び、隣室の母親の安静を保つために、「ざしき」を極めて静かな行動である就寝専用の部屋としていること、の二つの理由からと思われる。）
- 3 1、2の結果、起床在宅時間の内、夫妻・長女共に多くの時間を過ごす「食堂」が、北側の約4.5畳に設定される。

つまり、“寝たきり”者の存在が各室の行動・用途を大きく左右した結果、このような住まい方の歪みを生じたのであり、体の弱った高齢者と健康な家族員との相異なる生活（生活の時間帯・リズムや行動内容等）に基づく各住要求のせめぎ合いの結果とも言える。

要介護者と共に暮らす場合には、同居家族の生活との関連で室空間の配置や面積配分が考えられねばならず、その際に、両者の生活の違いに基づく住要求のぶつかり合いを、各生活ゾーン間にて吸収・調整する第三の空間・緩衝空間の設定が有効と考える。

2-3-2) 「house1」・「W」

このタイプの1例・Eさんのhouse1・Wとは、洗面脱衣室（図4）での洗濯作業である。平日帰宅後にも行っており、洗濯はEさんの担当のようである。また休日には他にも、朝食・昼食の用意や「学童保育の資料作成」等、家族のための時間が目立つ。

一方、住まい方の特徴としては、以下の3点を指摘出来る。

- 1 玄関脇の「寝室」は家族全員での就寝、大人の身の回り品収納、休日日の中の本人の作業（資料作成）を主に受け持つ空間である。＜大人・静＞
- 2 和室（「子ども」）には、子どもの用品がまとめて置かれ、就寝行動を除く子ども独自の行動を受け入れる室空間となっている。＜子ども＞
- 3 「居間」には大型家具はあまり置かず何もない空間を広く取り、家族の団らん、洗濯物整理、縫い物（妻）、バザー準備（妻）等の家事を中心とした家族のための行動がなされている。＜大人と子ども・動＞

以上の各室の用途配分は、行動主体と行動種類（特に動と静）の

調整の結果と考えられる。子ども室を「居間」と隣接する和室にしたのは、L・D・Kで両親が家事等の最中にも子らの様子が分かるように、共有時間の不足を埋めるために、との意図からである。

また、洗面脱衣室は住戸中央の狭い孤立した空間だが、Eさんは、台所の狭さと併せて「洗濯物を干す場が狭い。特に室内で、干す準備や洗濯物を取り込んで乾燥機に入れる前の準備が狭くてやりにくい」と洗面脱衣室への不満を述べていた。住戸面積が増大しても「水まわり空間は面積・設計ともほとんど違いが見られない」¹²結果であり、既婚女性の就労増加の中で、主婦一人が我慢すれば良かったものが複数の家族員が関わることで問題が顕在化していると言える。

2-3-3) 「house1」・「B」

3例のB・室外空間はいずれも広く、ここでのhouse1は、窓ガラス拭きとバルコニー掃除、植物の手入れ、洗濯物干し、庭いじりである。これらは皆、家事¹³ではあるが、3～5時間以上行い、その間妻は読書やテレビ視聴等を行っていること、現に“洗濯物干し”を行う1例はヒアリングにて「洗濯が趣味」と言い切っていること等々から判断すると、もはや家事の範疇を超えていると言える。

つまり、「house1」・「B」におけるhouse1の内容は“趣味化した家事”であり、室外空間の広さは、家事の趣味化を促すほどの行動の幅を拡げる可能性を持つと解釈できよう。

2-3-4) 「child」・「R」¹⁴

このタイプ2例の「child」・「R」の内容は、“子ども室で子どもの勉強をみる”というものである。40歳代の常勤、妻が無職で子ども2人、集合住宅居住で住戸面積100 m²前後という共通点を持つが、これらは全分析対象における多数派の属性でもある。

そこで、妻の生活時間を見た所、house1をかなり長時間¹⁵取っていることが分かった。つまり、衣食住の家事は妻が、子どもの勉強は夫といった、家事的な生活時間における役割分担が成立している。

一方住まい方の面では、個室2室を子ども、1室を夫婦の寝室としており、先の標準型と何ら変わらない室配分と使われ方であった。

2-3-5) 「child」・「K」¹⁶

3例の共通点は、妻が常勤で働き、比較的幼い子ども（末子就学前）を持つこと、生活時間ではchildと合わせて衣食住の家事、中でも食事の準備・後片づけを単独、または妻と共に行う時間が長いこと、そして行動と空間はchild対Kの直接的な対応関係ではなく、house1・house2を媒介として成立していることである。

また妻は、短時間で並行して多くの家事をこなしつつ、自身の時間も確保する。特に休日には、テレビ、新聞、読書、「勉強」等を数時間に渡って、夫が家事育児を行う間にも行っている。つまり、妻が出来ないから夫が手伝うのではなく、収入活動、家事育児、休息、そして自分の時間もまた夫妻両方が持つ。

住まい方に関しては、水まわり空間を中心に、片側が家事育児を中心とした“家族空間”¹⁷（動）、他方が就寝、大人用品の収納等に使われる静的な空間という構成であった。そして子どもが静的な空間で就寝後、“家族空間”は夫妻の団らん空間となる。

図5でも「子どもコーナー」と「居間」との間の可動間仕切りを取り払い、背の低い家具で仕切ることで「大人が家事をしていても子どもが何をしているか見えるように」し、この「子どもコーナー」と「6畳」を含め「居間」「食堂」を“家族空間”として一体的に使用する。また他事例でも「子どもが寝た後、起き出さないように、

こちら(LD)で2人で声を潜めて話をする」との声が聞かれた。

こうした空間構成は、既述の「house1」・「W」の場合と類似する。幼い子どもを持つ共働き家族にとって、親子間の就寝分離、子ども室の独立や個室の充実等の住要求より、家事育児を中心としたコミュニケーション空間の充実と、そのような動的な行動空間に対する静的な行動空間の分離が最も求められていると考えられよう。

2-4. 社会的文化的生活時間に重点を置く男性の場合

2-4-1) 「conver」・「Fp」(平日)

4例共に、30歳代で末子が乳幼児、妻は「無職」である。「conver」・「Fp」の内容は、帰宅後LD等で妻子とテレビをみながらの会話・団らんと、子どもが就寝後の妻との会話であり、後者は1~3時間以上と特に目立つ。また「夫婦だけの時間を持つため最低週1日は子どもを実家に預ける」等、意識的に確保している様子が伺えた。帰宅時刻が午後6時台とかなり早いことも共通する。

住まい方では“家族団らん空間”と家族全員の就寝空間との2空間構成である。子ども室は実際には“子ども用品置き場”、男性自身の専用室があっても日常的には使われず“物置き”となっている。

こうした構成は、動的空間と静的空間から成る点で子どものいる共働き家族の場合と類似するが、“家族空間”と“家族団らん空間”では中心となる行動が違ふ。また子どもの空間も、共働き家族では“家族空間”に、当類型では静的空間に近接して設定されている。

従って当タイプでは、子どもの成長後、典型的なnLDK型の住まい方となる可能性が大きく、現時点での2空間構成がnLDK型の住まい方への移行プロセスにあると位置づけられる。

2-4-2) 「conver」・「Fp」(休日)

この2例は家族員が多い(5人、6人)割に住戸面積が狭い(共に60.00㎡)。「conver」・「Fp」の内容は「L」での“テレビをみながら団らん”であり、その他の滞留空間は、排泄、入浴等のためのW以外、起床時間帯は全てFpである。ここから、人口密度の高さ故にFpで過ごす他ない、との推測も成り立つ。しかし例え面積が拡大しても、子ども室の個室化が「L」の面積拡大の方向に行くとされる。現に、広いバルコニーやこれに面した夫婦寝室等も有し、他の空間で過ごすと思えば十分可能と思われるからである。

以上から、「conver」・「Fp」は、家族団らんのための「LD」、夫婦寝室、及び子ども室から成るnLDK型平面の基底にある生活像・行動様態をかなり純粋な形で表現しているタイプとも言えよう。

2-4-3) 「pastime」・「Cs」

この4例は、比較的高齢(50~78歳)で成人した子どもを持つ。「pastime」・「Cs」は、夫婦寝室にて平日の就寝前数時間のテレビまたは読書だが、休日にも見られることから習慣と思われる。また、帰宅時刻が早く(17:00~19:30)、就寝までの多くをFpにてテレビ・読書等(pastime)で過ごす。つまり、pastimeはCs以外でも行われる。pastimeは外出時間(out)と負の相関関係を持つ¹⁸⁾ため、早い帰宅による在宅時間の延長がpastime増加に連なり、就寝前の寝室での読書・テレビの習慣がこのタイプにしたと言える。

なお、居室の割り振りを見ると、成人した子どもの部屋と夫婦寝室、及びLDから成っており、標準型と何ら変わることはなかった。

2-4-4) 「hobby」&空間

「hobby」は、「Cs」(2例)及び「P」と対応していたが、後者では、室形態が完全に独立した個室(完全独立・3例)か、そうで

ない専有空間(不完全独立・2例)かにより状況が異なっていた。

「Cs」は夫婦寝室だが、2例共に専有空間を持つことは可能である。が、その場合、専有空間か夫婦寝室のいずれかが「LD」等の“家族団らん空間”と近接せざるを得ない。また「P 不完全独立」の状況もこれと類似する。このタイプのいずれのPも夫婦寝室等を通らねば入室出来ないが、他にも余室である個室が存在する。しかし“家族団らん空間”との関係ではそのPの方が隔離された場所にある。

一方、「P 完全独立」の3例は、60歳以上で社会的にも第一線からは一応退き、平日・休日共に在宅時間が比較的長く、Pは必ずしも“家族団らん空間”と離れていない。Gさんの場合(図6)も、P(「書斎」)にて息子2人と会話するなど、行動内容の点でも“家族団らん空間”と近接する。“家族団らん空間”の喧騒から遠ざかる必要性は、成長した家族故に弱まっているとも解釈出来る。

すなわち、hobbyに重点を置く場合“家族団らん空間”から離れた1人になれる空間が必要だが、一般には独立性のある専用個室を要求しない。しかし、高齢になり在宅時間が延長した際には、いつでも自由に使える専有空間としての個室がhobbyの行動に対応する。

2-5. 社会的文化的生活時間に重点を置く女性の場合

2-5-1) 「society」・「P」

このタイプの4例はsocietyの内容により二分された。この内、Hさん(図7)らの場合はsociety(茶道指導、書道指導)とP(Hさんでは「和室」)が完全に対応する。またPは、本人専有かつ当該行動専用の空間であり“家族団らん空間”を通らずに外部から出入り出来る位置にある。これは、societyの内容が家族との日常生活行動と異質であり、逆に異質な行動を分離できる空間構造が必要とも言える。またその行動とは、個人的な趣味の拡張(プロ化・社会化した趣味)として、他家族員を経由せずに直接外部とつながる行動であり、そのような性格がPの位置に反映されていると言えよう。

一方、他2例のsocietyの内容は“友人の来訪”であったが、実際にはFpと対応しておりPでは「仕事」が行われていた。Fpが「基本的空間」¹⁹⁾であったために、次に特徴となるworkに対応していたPが前面に出てきた結果と解釈出来る。

2-5-2) 「pastime」&空間

「pastime」とは、「Fs」及び「Cs」(各2例)と対応関係が見られた。この内「Fs」では、夫の在宅時間が長いにも関わらず共有時間が極めて短いが、いずれもそうした状況を諦め、pastimeも暇つぶしの様子が伺えた。つまり「pastime」・「Fs」共に受動的な時間であり、結果的にそのような時間が長くなったと言える。

一方「Cs」におけるpastimeは“読書”である。しかしそれは“家族団らん空間”でも数時間行った後に、夫婦寝室のベッドで横になってまた“読書”する。つまり、Csの時間は、その空間の性格というより、ベッドがあることによる時間だと言える。

従って、「pastime」と「Fs」・「Cs」の各類型との対応関係は、pastimeとFs・Csとの対応関係から生じたとは言えない。

2-5-3) 「hobby」&空間

「hobby」とは、「P」及び「Fs」と対応関係が見られた。

「P」の7例(内1例が図8)は、子どもが成人に達し夫が存在する。またhobbyの内容は片手間の趣味ではないライフワークとしての性格を持ち、hobbyの全時間は“家族団らん空間”に近接した個室にて行われる。この利点として、散らかしたままいつでも取

りかけられる、*hobby* の合間に家事や夫との会話を行える等の利便性が挙げられていた。また、60 歳以上の男性の「*hobby*」・「*P*」の個室と同様、*hobby* 以外の多種の行動が行われ、*hobby* の行動空間としてより自分専有の空間としての意味がより強いと考えられる。

一方、「*hobby*」・「*Fs*」の 3 例については、1 例が夫の就寝中の“試験勉強”、残り 2 例が単身であることが背景と考えられる。つまり、前者では“試験勉強”が一時的な行動のため *P* の確保には至らないが、他者のいない一人の空間であることを必要とする。また後者については、単身故に *Fs* は *P* とほとんど変わらない。

以上から、“ライフワーク”としての *hobby* に 1 日の生活の重点を置く場合、自分専有の個室空間としての *P* がこれに対応し、“家族団らん空間”や家事空間と近接したところに位置する。また、*hobby* の内容が“ライフワーク”としての位置づけを持たない場合であっても、当該行動は、同室者のいない空間を必要とする。

2-6. 住居内収入生活時間に重点を置く事例「work」

2-6-1) 男性の場合

「work」は、「*P*」、「*Fs*」、及び「*Cs*」の 3 空間類型と対応関係が見られ、計 16 例は以下の 4 種のタイプに分けられた。

①平日の行動類型が「work」、かつ空間類型が「*Fs*」または「*Cs*」

「*Fs*」では中学生以下の子どもはおらず、“家族団らん空間”としての使用時間が限られ、現実には「*Cs*」と同種であった。

このタイプでは、妻も同じ「在宅勤務」・職業、または「ハート」で日中留守となっている。前者の場合、夫妻が同一空間で仕事を行う時間は相対的に短く、意識的に時間をずらしている様子が伺えた。

②平日の行動類型が「work」、かつ空間類型が「*P*」

末子が小学校低学年以下、または妻が無職である。*P* は独立した仕事部屋で“家族団らん空間”から離れて位置する。

③休日のみ、行動類型が「work」、かつ空間類型が「*Cs*」

④と同様、妻は「無職」か「ハート」である。*Cs* は夫婦の寝室だが、*P* 確保の物理的条件は存在する。しかし専有空間になり得る空間は“家族団らん空間”に隣接するのに対し、*Cs* は隔離している。

④休日のみ行動類型が「work」、かつ空間類型が「*P*」

P は“家族団らん空間”から距離をもつ室空間のコーナーである。*J* さんの場合（図 9）も「子ども部屋」の三段ベッドの奥に自分用の机を備え、「お父さんの書斎」と室呼称を書き入れていた。夫婦寝室（「和室」）の一部に設定することも可能にも関わらずである。

以上から、*work* に重点を置く場合にはまずは一人になれる空間が必要である。また、仕事が妻と同種の場合、及び妻が留守中に行う場合には共有空間に設定される。しかし、本人だけが行い、しかも他家族員の在宅が前提の場合には、“家族団らん空間”と距離を持つことが、空間の専有性や個室化より優先される傾向がある。

2-6-2) 女性の場合

女性の「work」とは、「*Fp*」(3)、「*Cs*」(1) 及び「*P*」(10) と対応関係があり、前 2 者の仕事内容は以下の 3 種に分かれる。

①店舗にて接客（「*Fp*」の 1 例）

②DK にて内職・家事育児の合間に行う（「*Fp*」の 1 例）

③夫と同一職種の在宅勤務（「*Fp*」の 1 例及び「*Cs*」の 1 例）

上記①は仕事内容から当然である。②に関しては“余室”もあるが、内職と家事育児の同時進行のために家事空間に近い“家族団らん空間”を選択している。*work* の内容が家事育児と並行し得る不

熟練労働と言える。③では実際の仕事時間帯は夫とずれていた。

他方、「*P*」における *work* は、熟練した専門的技術・知識を要する（家事と並行した *work* は皆無）点で共通するが、*P* の空間形態は a) *work* 専用室（5 例）b) 他室のコーナー（5 例）に二分された。

a) では概ね 60 歳以上（59～75 歳）で子どもが成人しており、*P* は就寝空間とは別の個室である。また、教室を開く等他者の訪問が前提の場合、“家族団らん空間”から離れ、かつ外部と直接つながる位置に *P* が設定される。しかし、原則的に一人で行う *work*（原稿を書く等）に対応した空間は、“家族団らん空間”と離れているが外部との直接のつながりは見られない。

b) の 5 例では、30～42 歳といった比較的若い年代である点、また自分専用室への希望が強い点が共通している。

すなわち、女性が *work* に重点を置く場合、まずは同室者のいない空間が必要である。また夫と同一職種の在宅就労、及び不熟練労働の内職の場合は“家族団らん空間”や夫妻の仕事場等の共有空間に設定される。しかし、専門的知識に基づく熟練を要する仕事の場合は“家族団らん空間”と離れた専有性・専用性のある個室が求められ、他者の訪問が前提の場合は外部に通じることが必要である。

2-7. 外出時間に重点を置く事例「out」・「sp-out」

2-7-1) 女性が平日外出時間に重点を置く場合

この類型は「若年子どもなし」及び「常勤」と関連していた²⁰が、実際には、18 歳以下の子どものを持つ「常勤」女性も存在（4/13）し、その子どもの有無により生活の内容が全く異なっていた。

子どもを持つ女性では多種の行動を短時間で行う様子が顕著であり、夫と子の日常的な家事協力がある。しかし「…家族の一員としての存在感を得るためには、もう少し多くの家事の分担が必要」（自由記述）と言うように、家事の時間短縮・効率化のみが目的ではなく、協力・分担を通して家族の結びつきを強めようとしている。また“複数で行う家事行動”を背景に、家事空間としての洗面化粧室や台所等の狭さや非合理的な動線設定に対する不満が聞かれた。

一方、子どもがいない共働き女性の平日は、一人での食事、身支度等、自分のための行動のみで単身者と変わらない。しかし休日では夫との共有時間が一転して長くなり、“テレビをみながらの夕食・くつろぎ”がその主な内容である。「*L*」等の非限定共有空間の拡充が強い住要求だが、この休日の生活時間の特徴が背景と言える。

2-7-2) 休日、外出時間に重点を置く男女の場合

女性 6 例は夫を含む家族と外出し、平日は標準型かこれに近い類型である。年齢は 28～45 歳と比較的若く、夫は「常勤」である。

男性 16 例は「常勤」で、平日は「normal」・「sp-normal」、休日の *out* は 6 例が妻か妻子と、残り 9 例は 1 人で外出する。前者の方（平均年齢 38.83 歳）が後者（同 42.13 歳）より若干若く末子年齢も低い。また後者の妻は、平日は「normal」・「sp-normal」、休日には妻 1 人または妻子で外出する時間の割合が高い傾向がある。

住まい方に関しては、男女共に標準型の域を超えるものではない。

2-8. 対応関係がみられない行動・空間

2-8-1) 女性休日の「groom」

この 2 例は、経済的・時間的に特別なゆとりをもつ特殊例であった。75 歳の会社役員は、365.28 m²の一戸建にて家事一切を家政婦に任せた生活を送り、“身支度”“外出準備”“入浴”“和服手入れ”等に長時間を費やす。一方、子どものいない無職 48 歳は“カルチャ

ーセンター”に行く前の“入浴、着替え・化粧”や就寝前の“入浴”が *groom* の内容である。また、両者共に家事時間が短くテレビの時間が長い。しかし「*groom*」独自の住まい方等は見いだせなかった。

2-8-2) 女性休日の「Cp」

3 例の内、2 例の「Cp」とそこでの行動は、“夫婦の寝室”での“夫とテレビ・団らん” (*pastime*) であり、居間等の非限定共有空間の非確立による結果であった。また、残り 1 例は“夫婦の仏間”にて“勤行” (*pasutime*) であり、重点を置く「*hobby*」(“編み物”)は“リビングルーム”(Fp)にて行われ、行動類型と空間類型が対応関係にない。2 人家族の割に住戸規模が大きい (105.17 m²) ために、“勤行”の専用室・“仏間”(Cp・Cs)が設けられ、この用途の特殊性から「Cp」となつたと考えられる。

以上から、「Cp」は行動との関係でみれば「Fp」と変わらず、特異な類型として本来取り上げられ得なかったタイプと言えよう。

2-8-3) 女性における「B」の空間類型

8 例の内、平日「B」の女性 (4) は中高年 (53~74 歳) で「無職」という特徴があったが、他の属性上の傾向は見られなかった。

「B」に実際に対応する行動は、“庭の草木の手入れ”“草花・野菜の手入れ”等 (以上家事としてカウント) と食事であり、大方 2 時間以上行う。しかし、男性の「house1」・「B」と同様、長時間にわたる家事行動は *hobby* として位置づけられるし、食事にしても B にて行われることで日常的な食事とは意味合いが異なる。

一方、B を具体的にみると、戸建てで庭がある (3 例) か、もしくは広い、または高層で眺望のよいバルコニーがある (5 例)。これらの事実は、男性の「house1」・「B」で述べた「バルコニーの充実による行動の幅の拡大」の可能性を裏付けていると言えよう。

3. 結論と提言

以上、生活時間配分の特徴に基づくタイプ毎の事例分析によって、具体的な生活実態が浮き彫りとなった。その結果、本研究対象における一般的・標準的な住居内の行動と空間が確認されると共に、そこから外れた特殊例の分析から、今後の住居の持つべき条件や計画上の諸課題が示唆された。以下、順次述べて行きたい。

3-1. 住居内における標準的な行動と空間

起床在宅時間において男性の多くは、食事等 (*physic*)、入浴等 (*groom*)、ぼんやり等 (*relax*) と、テレビ等 (*pastime*) を、非限定共有空間 (Fp・Fs) と生理的空間 (W) にて行う。一方、多くの女性は、男性の標準的な行動・空間に、単独での家事 (*house1*) を台所 (K) と室外空間 (B) にて行う時間がプラスされる。また、在宅時間の増加は、男性では非限定共有空間での *pastime*、女性では家事空間での *house1* の増加に結び付く。そして、このような生活を営む男女の多数派は、40 歳前後、夫は“ホワイトカラー”のサラリーマン、妻は専業主婦、2 人の子供 (末子小学生) と共に 60 m²、または 90~100 m² 程度の 3LDK に居住するというプロフィールを持ち、子ども 2 人に各々個室を与え就寝するだけの夫婦寝室がある。これが本研究対象における最も標準的な男女の生活の姿である。

こうした標準的な人々の生活は、根強い性別役割に基づく家庭生活の実態を改めて確認するものでもあり、これが存続する限りでは、nLDK 型理念に基づく空間構造自体に支障はないかも知れない。そもそも nLDK 型理念は、サラリーマンの夫、無業の妻と子ども 2 人

(「標準家族」) のそのような生活像を前提としていたからである。しかし、長寿化と少子化による子育て後の「空の巣」期の延長や既婚女性の就労増加の中で、“標準的な生活”は徐々に変化している。

そこで、行動と空間の対応関係において“標準”から外れる人々の住生活を対象とした事例分析を行い、そこから今後の住居計画における 5 つの課題・方向性を見出した。以下に述べる。

3-2. 後期高齢者の住生活と住要求への計画的対応

①開放性が選択可能な空間構成

同居者のいない食堂、居間等の非限定共有空間 (Fs) で、ぼんやりと休憩 (*relax*) する時間の割合が高いという特徴を持つのは、肉体的・精神的に活力が弱まった 70 歳以上の高齢者であった。彼等は、自身が受け入れられる範囲内で他者と接触したいという、選択性のある受動的な生活要求・住要求をもっていた。

このような高齢者の住居は、内外の接点にて他者の訪問を促しつつ、そこから住居内の私的な空間に至るまでの空間構成が、親しさの度合いや種類によって場の設定・開放性を選択出来るような段階的構成であることが必要である。

②要介護高齢者の生活ゾーンと同居家族の生活ゾーンの分離と融合

男性が、他者専有空間にて単独で家事を行う時間の比率が高いのは、家族に寝たきりの高齢者を抱えている場合であった。

この事例分析からは、要介護者と同居家族との両生活ゾーンとが分離しつつ重なり合う空間構成の有効性が浮かび上がった。両ゾーンの完全な分離は、要介護者の孤独や介護の非合理を招く一方、単純な隣接は、静的な生活と動的な生活を衝突させる。そこから、それらの静・動の各生活ゾーンの間に緩衝帯となり得る空間、時と場合に応じた両ゾーンの分離と融合を行い得る空間構成が必要である。

3-3. 子どもをもつ共働き家族の住生活への対応課題

①家事空間としての水まわり空間と「家族空間」

浴室・洗面所等の水まわり空間は、身体を清潔に保つためのリフレッシュ空間としての快適性に主眼が向けられて来た。また、調理等の家事の場・台所は、戦後の高度経済成長期以降、“主婦の城”(=家事専業者の場)としての合理性・快適性が追求され、規模・設備の寸法は“主婦”一人が家事を行うことを前提に設定された。

もとより、妻の就労による共働き化とは家事専業者が家族にいないことである。そこで、家族でどう家事協力を行うか、特に身辺のことを自立して行い得ない子どもや高齢者がいる場合にはそれは最大の課題となる。一方、家族が共に行う家事時間は、コミュニケーションのための時間、及び生活文化・生活技術の子どもへの伝承のための共有時間として、積極的な意味を持つ時間でもある。

そこで、1)複数が家事を行うことを前提とした水まわり空間の規模・寸法の見直し、2)家族が共に家事を行い共に休み交流する、という多様な行動を受容する「家族空間」の空間形態を探し出すこと、3)1)と2)の空間の有機的結合、の3つを計画課題として挙げたい。

②「子ども空間」²⁾と「家族空間」の連続

「子ども空間」は、nLDK 型平面の多くにおいて、夫婦寝室と並ぶ静的な個室の 1 つとして、居間等の“家族団らん空間”とは別種の空間として配置・設定される。しかし、共働き家族の短い在宅時間の中で、家族の共有時間を増加させ、家事・育児の同時進行を容易くし、子どもの生活上の自立を促すために、「家族空間」との連続性が保たれた「子ども空間」であることが望まれる。

またこのような「子ども空間」・「家族空間」は、動的な空間として位置づけ、大人用品の収納や就寝を受け持つ静ゾーンとは分離されることが必要である。子どもが幼いステージでは、分離した静ゾーンにて親子同室就寝が行われることで、子どもの就寝後には「家族空間」が夫婦の団らん空間として機能するからである。

3-4. バルコニーの充実による行動の幅拡大の可能性

バルコニー等の室外空間（B）で過ごす時間の割合が高い場合、広い、眺望の良いバルコニーがある等の物理的条件が存在し、そこでは趣味的な様々な行動が行われていた。つまり、室外空間の充実、少なくとも行動の幅を拡大する可能性をもたらすと言える。

3-5. 創造的活動²²の場の空間的条件

男性が創造的活動をまとまった時間行うには、第一に1人で過ごせる空間が必要である。また第二は、LD等の“家族団らん空間”からある程度距離を持つことであり、これは室空間の専有性（自分専有の空間）、専用性（その用途専用の空間）、独立性（独立した個室空間）より優先される。ただし、社会的に第一線から退き在宅時間が長くなった60歳以上では、“家族団らん空間”と近接した専有性と独立性のある空間に、創造的活動の場を設定する傾向がある。

女性が創造的活動に重点を置く場合は、子どもが既に独立している中高年以上である。その空間の第一条件もまた、1人になれる空間があることである。しかしその活動内容が“ライフワーク”としての位置づけを持つ場合には、専有性・独立性を有し、かつ“家族団らん空間”と近接する空間であることが必要である。

一方、*society*（接客等）に重点を置く女性の場合、その内容は“プロ化・社会化”した社会的文化的・個人的・能動的活動（*hobby*）として位置付けられた。この行動は、専有性・独立性と同時に専用性が満たされた空間を要求する。また“家族団らん空間”と隔離され、住居外と直接つながる空間であることも必要である。

3-6. 住居における仕事の場の空間的条件

仕事を集中して行うためには、同室者のいない一人の空間が必要である。その一人の空間が“家族団らん空間”や夫妻の仕事部屋等の共有空間における時間差による場合は、夫妻で在宅就労、妻が就労等で日中不在が前提となる男性、そして家事育児の合間に行い得る不熟練労働が仕事内容である女性の場合である。

しかし、これら以外の場合には、男性では“家族団らん空間”と離れていることが次の条件となり、その上で専有性・独立性・専用性のある空間（個室化した自分の仕事部屋）であることを求める。

一方、女性本人だけがその仕事を行い、かつ専門的な技術・知識に基づく仕事の場合には、専有性・専用性・独立性のある空間が求められる。また“家族団らん空間”と異なるゾーンに設定され、他者の訪問が前提の場合には、加えて外部に通じることが必要である。

以上の結果を、創造的活動の場合と重ね合わせると、いずれも一人になれる空間が必要な点で共通するが、“家族団らん空間”に対しては、仕事では分離したゾーンに、創造的活動では近接したゾーンに異なる空間的条件が求められる。しかし、他者の訪問を前提すれば仕事も創造的活動も同様である。また仕事については、他家族員の状況や仕事内容の違いなど、創造的活動の場と比較してより多種の要因がその空間的条件に関与していた。さらに、男性より女性の方が専有性・独立性の高い個室空間をより強く求めている。

従来、住居内における仕事と創造的な趣味的活動は、同じ様な性

格をもつ行動として、また、家族の状況や性別による差異は特に意識されずに室空間が設定されてきた傾向が強い。しかし、今後“ホームオフィス”や“余暇時間の充実”のベクトルで住居を考えていく場合には、以上の視点を考慮した空間設定が必要と考える。

以上、今後の住居の持つべき条件、計画課題について、①後期高齢者の生活、②子どものいる共働き家族の生活、③半戸外空間の意味、④創造的活動の場の確保、⑤生業の場としての住居、の5つの面から提言した。今日における住生活の多様化・個別化は、多くの社会的・経済的な制約を受けつつ複雑な経路を取りながらも、個々ばらばらに拡散していくのではなく、いくつかの方向性をもっていると言えよう。

謝辞

統計的データ解析手法を用いた分析に当たっては、文部省統計数理研究所の大隅昇教授に懇切丁寧なご指導をいただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

¹ “標準集団”とは、各人の費やした時間配分の比率ハタートの観点から類型化を行った際に、等質な傾向をもつ共通のパターン（＝一般的な時間配分）として認められたサンプル群を指す。

² “特異な類型”とは、類型化を行った際に、はずれ値として特異なクラスター（＝特異な時間配分）として分離されたサンプルを指す。

³ 山崎さゆり・高橋公子：時間量による生活の類型化 生活時間からみた行動と滞留空間の対応関係に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、No.491,1997.1

⁴ 「常勤」「ハート」「在宅勤務」「その他」「無職」の別を示す。詳細は注3文献参照

⁵ 山崎さゆり：行動類型と空間類型の対応関係 生活時間に基づく住居内の行動と空間の対応関係に関する研究 その2、日本建築学会計画系論文集、No.504,1998.2

⁶ 標準型は、本研究対象における最も一般的な生活時間タイプの特性をより明確に把握することを目的として設定した。

⁷ 第1回目の対応分析のサンプルスコアを用いたクラスター化の繰り返しにより、ばらつきの大きい変数と特異なクラスター（特異な時間配分をもつサンプル群）を抽出後の対応分析サンプルスコア。詳細は既報（注3）参照。

⁸ 標準型の全成分（男性12成分・女性16成分）のサンプルスコアを通して、中央値に近いスコアをもつサンプルを取り出した。結果として、全サンプルスコアにおいて20～80%の範囲の値をもつサンプルが取り出された。

⁹ 男性の場合、起床在宅時間における滞留空間は主として非限定共有空間（ $Fp \cdot Fs$ ）と W の2種で成り立ち、行動時間についても、標準型の特徴である $groom \cdot physic \cdot relax \cdot pastime$ の4行動時間の割り振りで成立する。一方、女性の場合は、住居内では、 $groom \cdot physic \cdot pastime$ に加えて $house1$ の行動時間を、 $Fp \cdot W$ 、そして $K \cdot B$ にて行っている。

¹⁰ 全サンプルスコアを通し最も中央値に近い値をもっていたサンプル。

¹¹ 家族の共有空間としてのLDとn個の個室（夫婦の寝室+子ども室）

¹² 江藤佑子他「集合住宅における水まわり空間に関する研究 その2『衣家事』を行う場所の実態」1994年度大会日本建築学会学術講演梗概集P118

¹³ 園芸等の行動に関しては、ヒアリング等にて“趣味である”と答えた場合以外は、全て「家事」としてカウントしている。

¹⁴ 「child」・「R」の対応関係は「hou2-chi」・「R」として抽出されたが、事例分析の結果、 $house2$ は無関係であった。

¹⁵ 2例の $house1$ は、全女性平均値の約2倍。

¹⁶ 「child」・「K」は平日では「hou2-chi」・「K」として選出された。

¹⁷ “家族空間”とは、家事・育児等を含めた家族共有・協働の空間である。これに対し、後に述べる“家族団らん空間”とは、会話等を中心としたいわゆる「家族団らん」の中心的な場としての意味をもつものと定義する。

¹⁸ 注3文献参照

¹⁹ 大概の人が住居内で一定時間は過ごす空間（詳細は注3文献参照）

²⁰ 注5文献参照

²¹ 子どもの専有空間と定義する。この「子ども空間」は独立した部屋かコーナーかといった室形態の如何やそこで実際に行われる行動の種類を問わない。

²² 創造的活動とは、行動分類における「社会的文化的・個人的・能動的活動」（*hobby*）を中心とした一連の活動を意味する。